

東海地方における

自給飼料栽培の現況と問題点

愛知県畜産課

野村 晃 義

一 まえがき

東海地方における農業経営は概して、労働・資本共に集約的な経営地帯で、特に東京、大阪の消費都市圏の中間にあつて、今後共益々此の傾向は強まるものと考えられる。

しかしながら、農家の経営規模は七〇%前後でしかも專業農家は三五〜五〇%の範囲内にある市町村が多く、一部都市近郊農村においては專業農家においてもその子弟がサラリーマンとして農業以外に働く場所を求め出る傾向が強く、農業労働力の質的低下が急速に促進されつつあつて、今後資本投下量は益々増大するというのに、蓄積の無い農家あるいは労力的に新しい技術の受入態勢が整備されていない農家もまた漸増することが想像されるものであり、畜産の発展もまた一般農業の発展ないしは変化と異質のものでないと考える。

ここ数年の間一戸当りの飼育頭羽数が、勞力、資本、経営方針等に差はあつても平均して経営拡大の方向にあることは事実だが、反面小規模飼育農家の凋落もまた事実で統計面には一戸当り飼育頭羽数が増加し

たことになつて来ており文字通り農業の転換期と云える状況にある。従つて畜産行政上よりみても、極めて重要な秋と言へるが、

自給飼料の増産が土地利用の一型態である以上、この一般の傾向を度外視することはできないことがある。従つて本地域の自給飼料の栽培は畜産経営農家にあつては極めて集約的な栽培と利用が要求されるようになり、事実また、単位面積当りの資本投下量、収量共に他地区のそれらより多くなつてゐる。

さて、まえおきが長くなつたが、自給飼料の栽培の現状はやはり酪農家がその大部分であり、肉牛、肉豚経営農家の一部にわずかに栽培がみられるようになって来た。しかし後者はやはり自家生産の麦類、甘しよの飼料化が優先してゐるのが現状である。

二 酪農と自給飼料

東海地方の酪農家の耕地経営規模は一般農家に比べ幾分多く平均一・二〇ヘクタール前後であり、乳牛の飼養頭数も比較的多い。一部の農家では一〇頭以上も飼育し、日量一八〇キログラム、年間一五〇万円以上の粗収入を得て

いる農家も多くあるが、これらの人々に共通な点は、比較的畑作地帯であり、耕地の大部分が、牧草あるいは飼料作物であり、また開墾地等で、附近の生産力は極めて低いのに、牧草、飼料作物は極めて多取であること、耕地が比較的集団化され、機械が入り易いこと等である。こうしてみると、

新しい酪農は、地味の悪い処でも良いからある程度集団化した場所へ移し、古い農村の部落より脱皮しなければ、多頭飼育は成功しないかも知れずこれは、少なくとも酪農近代化の一方であると言えよう。しかしながら、酪農家の多くは、依然として分散した耕地、一戸当り五ヘクタールの耕地に一般作物とわずかの飼料作物により、飼料の自給率も五〇%未満で副業的な経営を続行してゐるのが現状であるが、現在の農地所有の型態、あるいは地価の値上り、農村の慣習等より無理なことかも知れない。もちろん小規模酪農家等には協業化が指導されているが、これまた円滑な運営をみるのにある程度の年月は必要となる。

乳牛に牧草、飼料作物の給与は農家自身痛感してゐるもの前記耕地面積の狭小から機械化が進展せず、勞力等から制約を受けて急速に進展しないが、愛知県下では飼料作物の種子需要は昭和三十年に比べ約二倍となつており、因みに乳牛一頭当り種子購入金額も大要は昭和三十年の一・六〇円から昭和三十五年の二八〇円に増加して来たが、農林省の統計資料によれば、牛乳生産費のうち飼料費の構成はやはり購入飼料が六〇%前後と、自給飼料費より多くなつて

おり、今後ともその栽培の増加が望まれるものである。

三 畑作における自給飼料

畑作振興が叫ばれてより久しくなるが、今日相変わらず畑作物の大部分は甘しよ、麦類であり、いずれも生産過剰で政府が苦勞してゐることは周知のことである。反対に酪農家にあつてはその持つてゐる耕地の全部に飼料作物、牧草を栽培してもなおかつ土地が不足し、飼料の自給率が低下し、牛乳生産費の上るを心配し、乳牛頭数を増加しようにも実行できず苦勞してゐる農家のあることもまた事実である。畑の作付を果樹、高級野菜、特殊園芸に転換を計画しても、資金、勞力等で非常に困難があり、急に転換できないのが日本農業の現実である。麦作転換にしても、政府も農民も共に米作以上の熱意をもつて事に当り、徒らに農民のためと補助金政策でなく、農民の勇氣と自信に期待して、価格切下等の措置をとらなければ畑作転換の本来の目的は解決しない。

ここにある酪農家の経営を紹介しましよ。

愛知県知多郡東浦町の戸田勇氏は、昭和二十六年に乳牛二頭の酪農から出発したのであるが、開拓地であり、現金収入を得るために当初は野菜、果菜、根菜類を栽培していたのを、昭和三十年より本格的に酪農に切換え、同時に従来あつた水田も畑とし耕地面積二〇〇ヘクタールが二五筆に分れていたので整理し二〇筆とし、その作付も夏作はと

うもろこし、ロゾク、スーダングラス等であり、八月下旬に家畜かぶを播種し、夏作の跡地はライグラス、あるいは四〜五年利用するルーサン畑とする輪作にして現在搾乳牛一五頭、育成牛四頭を飼育しているが、経営を単純化し、機械化によつて労力を節減すれば、まだまだ農地を拡大したいと言つておられるが、残念ながら地価の値上りで簡単に購入できない現状である。従つて一部の土地を借用し（六五畝）ここに牧草（ルーサン、オーチャード、ライグラス、赤クロバミ混播）を栽培し経営拡大を図つておられるが、畑作経営の見本ともなるもので、飼料自給率六〇%からみて相当の収益が考えられる。

また豊橋市の北谷忠雄氏は昭和三十三年度の中部六県の乳牛共進会に経産牛の部で優等になり、昭和三十五年の全国共進会で一等になつた乳牛を飼養しておられるが、この人も耕地の大部分が畑であり、良い牧草、飼料作物を栽培することだと割切つた考え方の持主でもある。少し変つた栽培の事例をみると、耕地にルーサンを二尺五寸間隔の条播とし、その間にイタリアンライグラスを条播し、ライグラス刈取後はロゾクを播種する方法で、夏期はルーサン、ロゾクを同時に刈取る方法をとつておられることです。また、小牧市の塚本牧場では耕地（開拓地）の大部分がルーサンで、その刈取はモア利用は青刈、サイレージと極めて簡単な方法で乳牛を一五頭飼育しておられるが、乾燥地だけに、ルーサ

ンを選定されたこと、また利用の方法を簡単にしたこと、機械化した等により、労力が極めて少なく安定した経営をしておられる。この塚本牧場は愛知用水の受益地帯でもある関係で、自らの資金で、牧草地にかんがい施設を設置されたが、その成績は今後の用水受益地帯の参考になるものであり注目されている。

以上三名の経営内容をみると、いずれも、労力を節約するために牧草を耕地に栽培し、その方法は極めて単純化して成功しておられるものであるが、一般的には東海地方の平坦部にあつて、四月中旬までに播種されている夏作物は、やはり青刈とうもろこしが最も多く五月上旬以降ではロゾク、スーダングラス等が多い。家畜かぶは八月下旬より九月上旬の間に播種され、年内刈取を予定するライグラスは遅くも九月上旬に播種されている。十月に入つて、エン麦、ライ麦等の播種期になるが、オートウィックンと混播する場合は上旬までに終るよう播種しなければならぬ。また、できれば、エン麦の播種床の南側あるいは東側に二条播のかつこうになり、手間はかかるが播種するとその後の生育が良い。一〇畝当り年間の青刈収穫目標は三〇トであるが、普通の方法で二〇〜二五トは生産され、乳牛一頭当り一年間分を確保するよう努力しなければならぬのが本地域の自給飼料生産上における宿命である。

四 水田裏作における飼料作物

従来水田裏作として栽培されて来たレン

ゲ、あるいはエン麦、レープ等に代つて最近イタリアンライグラスの栽培が普及して来た。これはレンゲと異なり、再生力が強く、何回も刈取が可能であり、しかも根の発育が盛んなため、この細根が有機質肥料となつて土壌改良に役立ち、多少施肥、管理に注意すれば、水稻の収量には影響もなく、更に、播種期による収量差が少なく、利用上からは青刈、乾草いずれも適当であり、特に乾草は養分のバランスも適当であり、分析結果では濃厚飼料に近い成分を持つ等が農家の間に認識されて来た結果である。しかしイタリアンライグラスは吸肥力が極めて強いので、思いきつて多量の肥料を施用しないと地力が劣り、水稻の収量に悪い結果をもたらすので、注意する必要がある。愛知県幡豆郡一帯の水田裏作のライグラスは、本年第一回刈りで坪当り三〇キ以上の農家が数名あつたが、当地方では酪農経営改善事業で、トラクターを導入しモアで刈取り、乾燥機によつて乾草を作り、一部を青刈またはサイレージとして利用し、大体二〇キで一頭一年分の粗飼料を確保したいと一生懸命だが、事実可能な段階に入つており、水田酪農の今後の方向ではないかと考えられる。もちろん、このためには、耕地の交換分合、区画整理、農道の拡張整理、用排水施設の完備等基盤が確立されなければならないが、従来の耕地整理事業土地改良事業に見られた、米作りのみのものであつてはならない。こうして根本的には田畑転換が可能になることが理想的ではあるが、現状は、米作りのために

実施された整理、改良事業であり困難であるが、当分の間は利用上において、乾草、あるいはサイレージとして貯蔵を考へ年間を通じて粗飼料の確保を図る必要があり、これがために前記施設の設定もまた重要となる。

五 牧 野

東道地方の牧野は一般に採草牧野が多く集約的な利用を図つてはいるが、静岡、岐阜の一部ではかなりの面積があつて放牧利用の牧野もある。採草牧野の草種の基本は、オーチャード、赤クロバミ、イタリアンライグラス、ルーサンであり、放牧利用牧野では、前記にラディノクロバミ、ペレニアルライグラス等が混播されている、分布上からみれば、平坦地は採草牧野が多く、草種及び夏期早刈の点で三〜五年の比較的短年で更新する必要があるが、最近では各県共にブルドーザー等機械開墾による能率的な造成が実施されるにおよんで、各地にかなりの面積が造成されている。しかしながら、やはり絶対的な土地不足から単位面積当りの採草量を増加するためかなりの施肥をしており、愛知県下の例では一〇キ当り基肥に炭カル二ト、鶏糞二〇キ、草地肥料一〇キ前後が標準であり、追肥として十二月上旬、三月上旬に尿素二〇キ以後刈取り毎にやはり同量程度の施肥をしているが、平均一番刈の一坪当り産草量は一五キ前後である。刈取回数は年間四〜六回が実施されているが、利用上では一番刈は青刈、二番刈乾草、三番刈は梅雨の関係で青刈四